



## 下浦石工の歴史

下浦の石工業が盛んになった理由の一つに、下浦には、下浦石という良質の砂岩が大量に産出されたということがあげられる。下浦は、戸ノ崎半島から金焼、石場を経て、冷水岬より後小手の塙田山に至るまで、砂岩層の岩場が続き、それらの全地域から良質の石材が採出された。

しかし、どんなに良質の石材があっても、それを加工する技術が必要である。下浦の石場地区にある共同墓地の中に、天明三年に建立された「松室五郎左衛門の墓」がある。この松室五郎左衛門が下浦石工の元祖であるといわれている。五郎左衛門は、元は肥前の白石藩の武士であったが、わけあって浪人となり、宝暦十年（1760年）天草に来て、下浦の石場に住み石工となった。その後、石工の技術を周囲の人々に伝授して石工業の発展に尽力し、天明三年に没したといわれている。

また、五郎左衛門の墓から東方約200mの岬には、五郎左衛門の靈を鎮めるために「花岡大明神」として祀られている。

石塔の需要が急激に増加した江戸時代、下浦石工たちは、九州一円、中国、四国地方までも活動の場を広げた。長崎のオランダ坂の石置や、グラハーバー邸の庭石、八代干拓の堤防石に使用されているのは有名。また、天草市船之尾の国指定の重要文化財である「祇園橋」や、天草各地の橋の多くにも下浦石が使われ、現在も残っているものがある。

下浦の石工業は、今後も若い後継者「天草石匠会」を中心に伝承していくであろう。



## みかんの里物語

下浦は、海に面した傾斜地が多くみかんの栽培に適していることから、村の振興のため柑橘栽培に取組むことになったと思われる。

明治43年に、金子満作氏が温州みかんの苗木を日本導入して植栽されたのが、みかん栽培の始まりといわれている。明治45年には、猿ノ城（現後小手）の吉田敬太郎氏や東外園の近藤文造氏らも、みかん栽培を広く始められ、下浦全域に広がった。しかし、現在は過疎化による後継者不足等の要因により少なくなっている。

ほんかんについては、石場の松岡新太郎氏が大正14年に、愛知県から苗木30本を取り寄せて試植したのが始まり。その結果、予想以上の品質であつたため本格栽培に取り組み、「天草ほんかん」発祥の地として知られることになった。今なお、当時の原木は健在である。

その後、いろいろな柑橘新品种種が出現しているが、「天草ほんかん」は根強い人気がある。「清美」と「ほんかん」を交配した「デコポン」は、新しいヒット柑橘果物となつた。

下浦みかんは、ふるさとの名産として、果樹同窓会の若手後継者により受け継がれている。

（マップについてのお問い合わせ先）

**下浦町公民館**  
〒861-6551 熊本県天草市下浦町 1282  
TEL0969-23-4733

**天草市役所地域振興課**  
〒863-8631 熊本県天草市東浜町 8-1  
TEL0969-23-1111

## 下浦獅子舞の歴史

下浦の獅子舞は、下浦神社の獅子舞として江戸時代に、倉岳町の宮田より伝わり、下浦から瀬戸の海峡を越えて天草下島各地に広まった。

传统的ある郷土芸能下浦獅子舞を永く伝えるために、昭和46年に有志の手により保存会が結成された。以後、神社の秋祭りには勿論、広く各地に活動を展開している。特に、平成10年には、ニューヨーク・カーネギーホールの公演にも参加した。

下浦獅子舞は、二人一頭の獅子を操り、青獅子と赤獅子の一対となっている。

前半は、玉をやるぞ「コイコイ」と招少年の玉を求めて狂氣の如く暴れ廻り、そのうち、疲れて眠ってしまう。後半は、優しい奏楽の音に目を覚ました獅子が再び玉を追うが、どうでも奪うことができない。機をとらえた少年は、すかさず獅子の背中に打ちまたがり、玉緒をくわにして堂々と退場するという、実際に勇壮活発にして優雅な獅子舞である。

## 下浦加工グループ

下浦加工グループは、昭和62年に町内4つの生活改善グループが農協の支所の一部を借りて週一回朝市を開催して販売を始めた。その後、順調に販売も伸び加工施設も手狭になつたため、平成9年「オレンジショップ」を建設。着実に実績を上げ、町の名所となっている。平成10年度には食アメニティ・コンテストにおいて「あやむらさき万十」と「あやむらさきばたもち」が農林水産大臣賞を受賞した。



# 天草のアート・ストリート

